

◆総務大臣賞◆

〈学校教育部門〉

「手話を使った日韓インターネットライブ交流」

愛知県立岡崎聾学校

〒444-2111 愛知県岡崎市西阿知和町字御用田1-23

■実践事例報告の概要

本校は韓国の大邱（テグ）栄話学校と姉妹校提携を結び、国際交流をしている。大邱栄話学校は本校と同じ聴覚障害のある幼児児童生徒のための学校である。平成19年度から新たな試みとして、インターネットライブ交流を行った。両校の生徒が手話でコミュニケーションを図り、国際理解を深めることをねらいとした。インターネットの活用により、気軽にいつでも瞬時に多くの生徒が交流できるようにしたいと考えた。

実践のねらい

本校は韓国の大邱（テグ）栄話学校と姉妹校提携を結び、国際交流をしている。大邱栄話学校は本校と同じ聴覚障害のある幼児児童生徒のための学校である。毎年本校の高等部2年の生徒が、修学旅行で大邱栄話学校を訪問し、交流を深めている。

平成19年度から新たな試みとして、手話を用いたインターネットライブ交流を行うことにした。両校の生徒がお互い手話でコミュニケーションをとり、会話の内容を理解することで、国際理解を深めることをねらいとした。また、インターネットを使うことで、訪問している生徒だけでなく、他の生徒も交流ができるようにしたいと考えた。

特徴・工夫・努力した点

海外の学校とリアルタイムで交流をする場合に、一般的に言語の違いが問題となるケースが多い。手話を使うことにより、この問題を解決できるのではないかと考えた。日本の手話と韓国の手話は共通点が多い。手話を使えば、日韓の生徒同士が会話をすることができ、互いに内容を理解するこ

とができる。手話を使うことで海外の人と話ができることと、コミュニケーションをすることの楽しさを実感させ、国際理解を深めさせたい。手話で交流をする際に、手の動きが鮮明に相手に伝わること、指の形が見分けられる画質が得られることが課題となる。さまざまな通信ソフトのテストをし、実際に使用できるものを探した。また、単発的なイベントではなく、今後継続して交流が可能なシステムの構築を目指した。

実践内容


本校の高等部2年の生徒が、大邱栄話学校に修学旅行で訪問した際に、インターネットライブ交流を行った。はじめに大邱栄話学校の授業に本校の生徒が参加し授業交流を通して、親睦を図った。その後、韓国の生徒が日本にいる本校の生徒と、手話を使い会話を楽しんだ。また、本校の生徒から授業交流の様子を日本にいる生徒へ報告をした。

大邱栄話学校を訪れた本校の生徒が帰国した10日後、再度インターネットライブ交流を行った。修学旅行に参加した生徒が、韓国の生徒に訪問した際のお礼を言い、交流が終わった後のお互いの様子を、手話を使い報告があった。また、本校の中学部の生徒も参加し、交流を楽しんだ。

OKAZAKI School for the Deaf

愛知県立岡崎聾学校

〒444-2111
愛知県岡崎市西阿知和町字御用田1-23
TEL 0564-45-2830
FAX 0564-45-6248
Mail home@okazaki-sd.aichi-c.ed.jp




メール


地図はこちら

2007/9 新着情報に「幼稚部説明会」を追加しました。
 2006/10 新着情報に「文化祭」を追加しました。
 2006/09 新着情報に「高等部公開(第2回)」を追加しました。
 2006/09 新着情報に「幼稚部説明会」を追加しました。

★最終更新日 2007/09/14

← 台風、大雨における登校時等の対応について
 ← 東海地震等における登校時等の対応について

平成19年度学校評価

ネットワーク管理者 学校長
 HP制作者 愛知県立岡崎聾学校 情報教育部
 Copyright ©2000-2006 okazaki-sd.aichi-c.ed.jp
 All right Reserved.

実践結果

生徒は普段使っている手話で会話をすることができるので、交流の際に消極的になることなく、自信をもって取り組むことができた。自分の手話や表情が瞬時に相手に伝わり、その反応がすぐに返ってくることに、どの生徒も驚いている様子であった。手話を使うことで、相手に伝わるのがわかり、外国の人たちとコミュニケーションをとることの楽しさを実感することができた。メールや作品交換では体験できない効果があった。

これまでの交流は修学旅行に行く高等部2年生が中心で、他の学年は直接韓国の生徒と交流することができなかった。インターネットライブ交流では、現地を訪れることのできない生徒でも、交流をすることができた。

交流で友だちになった生徒同士が、自主的にメールの交換をし、個人的な交流が始まったケースも見られた。

また、実際に交流をしている時に、当初心配していた画質や転送速度の遅れもなく、手話を活用するのに十分な環境で交流を行うことができた。インターネットライブ交流は、単発的な交流ではなく、今後も継続可能な交流であることが分かった。

考察（今後の課題）

今回の交流は、愛知県の県立学校で、海外とのインターネットを使ったリアルタイムの交流を成功した初めてのケースとなった。今後は他校への情報提供を行っていききたい。

今回の実践で、今後継続して交流が可能なシステムの構築ができた。日韓共同での調べ学習や、パソコンを使った共同作品の作成など、インターネットライブ交流の内容も深めていけるようにしたい。さらに、姉妹校交流を深めていきたい。

今回は、高等部の生徒の海外の学校との交流を行ったが、今後は小学部、中学部が地元の小学校や中学校と交流する際にも、インターネットライブ交流を取り入れた活動を行っていききたいと考えている。また、小学部、中学部の児童生徒にも韓国とのインターネットライブ交流を今後取り入れたい。

聾学校が地域のセンター的な役割を果たしていく時に、行政や医療など、さまざまな機関との連携が必要になる。今回用いたインターネットライブ交流が地域との連携にも応用でき、さまざまな情報交換ができるようにしたいと考えている。